



第 26 号
発行・鴻文会

山口大学 文理学部 文学科

人文学部 同窓会
山口大学人文学部内
電話 (083) 933-5200
(連絡事務所)

山口市平井 773-2
沖田ビル 202
電話・FAX (083) 928-4527
郵便振替口座 01500-4-15902
http://
homepage3.nifty.com/koubun/
メール:koubunkai@nifty.com



長州五傑記念碑

(2006年4月26日、グレアム・フライ駐日英国大使をはじめとした来賓及び大学関係者等約100名が出席し、長州五傑記念碑の除幕式典が挙行されました。)

もうこりた
忘己利他に生きる

権代 鉄也

私は学生時代、哲学者西田幾多郎先生や禅学者鈴木大拙師、禅僧澤木興道老師らと親交の深かった元禅僧小林雲道人師の自宅（山口市小鯖）へよく通った。三年生になったばかりのある日、先生は出家ということについて話された。あの迫力は忘れることはできない。「仏教界に新風を起こしてほしい。坊主は妻帯してはならない。物乞いをしてはならない、食べるものがなければ飢え死にすればよい。そういう人こそ坊主である」。私は驚いて返事を一年間待つてくさいとお願いした。しかし結局師が期待された理想の僧の誕生は実現しなかった。私は卒業後教員になり妻帯した。やがて子供が四人生まれた。現在孫が十一人いる。教職も家庭も、私から見ればそれなりに充実したものだっただけ。

大学を卒業してもう四十年が経つ。インドの四任期(学生期、家住期、林住期、遊行期)で言えば、家住期はとうに越え、残された任期はもう遊行期だけかもしれない。自分の死がどんどん近づいているという意味である。還暦数年前に伊賀焼の窯元

と知り合った。久しぶりに大きな人物に出会ったと思った。白洲正子のエッセイに「日本のたくみ」として登場する人物である。その人が私を比叡山に誘った。比叡山・覚性律庵には日本中から有名な人々が集まってくるように思えた。しかし庵主の光永澄道大行満大阿闍梨さんは、例えば人間国宝の人と私をまったく対等に扱って平然とされていた。せっかく多くの人々から生き仏と崇められている大阿闍梨さんと時間を共有しながらも、私たち信者でない数人は、飲み食いとお話談が中心で、説教も一切なし、ときおり観月会など寺の行事に参加すると般若心経を耳にするぐらいが唯一の宗教的雰囲気であった。それでも大阿闍梨さんはいつもし機嫌だった。夜は僧堂に寝た。

このような過去を自嘲的に振り返れば、私はいい加減な人生を歩んできたと言ってもよい。自分の無知さ加減に気づいているがもう手遅れである。それでも余生は自分なりに充実して過ごしたいと考えた。具体的にはわずかな田畑をのんびり耕し、採れた米や野菜を食して生きるいわ

ゆる晴耕雨読・自給自足の生活に徹することを考えた。その真似事を今もしているが、それに徹することはできない。人の現在は、ある意味で重荷といえるかもしれないが、その人の過去のすべてから逃れることができないからである。

さて、私の家の玄関に、光永澄道大阿闍梨さんが亡くなる直前に書かれた「忘己利他 極慈悲也」の色紙がかかっている。己を忘れて他を利用するは慈悲の極みなり。最澄上人の言葉である。大阿闍梨さんは平成十七年十一月に遷化された。数日後に比叡山で一山葬が行われた。私はその葬儀中に師から無尽蔵なるものをいただいていることに気が付いたのである。生前のある日突然、「権代さん、引退したら山口に帰るからいっしょにやろう」と言われたことがあった。師は山口のご出身だった。私は車で師をあちらこちらにお連れし、時に酒に付き合うぐらいのことを想像していた。だから「いっしょにやる」内容については確認しなかった。師の葬儀中にと、忘己利他を私にずっと働きかけておられたことに気が付いたのだ。忘己利他とは宇宙のすべてが変化することに気が付き、自ずから慈悲心が生じることではなからうか。

利他といえ、私はこの七年間に四回ネパールを訪問した。目的は、医師のいない山村の医療キャンプの手伝いと小学校訪問である。私の関係しているネパールにおけるボランティア活動の母体となる組織は二つある。一つは「日本ネパール友好協会」(代表 写真家オギノ芳信

氏)であり、もう一つはその支援団体「ネパールみずゞ基金」(代表 詩人矢崎節夫氏)だ。医療キャンプは、ネパール人医師を含めた十数人で医療チームを編成し、日本人看護師がそれに加わる。ネパール人は白内障で目が見えない人が多いので、目の治療を主とし、内科外科の医師も参加してそれぞれの科目の診察治療をする。現金収入のない山村の人々にとって医療費は想像もつかないほど高額であるが、私たちのキャンプではすべてが無料である。一方、私たちの建てた学校訪問は一年に一回必ず行う。ネパール政府は外国人が関与した学校には、そこに勤めている国家公務員の教員以外は一切予算を組まないからである。校舎の修理や増築はもちろんであるが、自治体が支給しない教職員の給料も私たちの負担である。学校訪問時には、学童一人ひとりに駆虫剤、ビタミンA剤を吞ませ、文房具などを手渡す。

私たちの旅行は冒険旅行でもある。二年前、ネパール政府がテロリストと位置づけていた武装集団マオイストの活動が激しいため、外務省は私たちの渡航の見直しを迫った。ネパールの軍隊も警察も怖くて西ネパールの現地には駐在していなかった。しかしオギノ氏がマオイストにていねいに説明した結果、彼らは私たちの活動に理解を示してくれ、滞在中の身の安全を保証してくれた。おかげで有意義なキャンプを終えることができた。テロリストに守られた医療キャンプであったと言える。

ネパールにおけるボランティア活動は

文字どおり「利他」であるが、決して弱者救済ではない。私たちは弱者救済という気持ちを抱いたことは一度もない。彼らは経済的には貧しいけれど、決して弱者ではない。教室で子供たちに鉛筆などのプレゼントをする。途中で品物が切れ再び配布を始める時、配ったと思って一人を飛ばしてその次の子供から配布することがある。しかし飛ばされた子供は神様の思召しと考えるのか申し出てこない。だから私たちは細心の注意を持って配布しなければならぬ。神を信じているからか、どの子供の目を見ても邪気がない。オギノ氏は彼らを「神の子」と呼んでいる。また、白内障の手術をして視力を回復した人たちは涙を流して私たちの手を握って感謝する。心からありがたいと思っていることがひしひしと感じられる。この瞬間私たちは疲れを忘れてしまふ。そして不思議なことに、この場にいることに対していつも感謝の念が湧いてくる。

人間だけでなく動植物も俱会一処であると思う。今も野良猫ミーナが外で私を求めている。身体をなでてやると、地団太を踏んで喜ぶ。たかが野良猫一匹の喜びだが、私も深い喜びを共有する。また私の住んでいるこの付近をテリトリーとしているカラス一家とスズメ一家が毎朝挨拶に来る。残飯を少しやる。彼らがおかげでほかのカラスは来ない。一般にカラスは人々に嫌われているが我が家ではスズメと餌を分かち合っているように見えるかけがえのない家族である。カ

ラス夫婦は私を識別しているように思う。私も彼らを対等の存在として付き合い合っている。あるいは昨夏猛暑の中で畑の草取りをして熱中症直前を何度か体験したが、「また生えて来いよ」と雑草と対話しながら草を引いた。引き抜いた雑草は積み上げて堆肥とし、同じ土に返す。動物や雑草との共有時間も、私の心のこりを澄ませてくれる。動植物も人間も宇宙の中で一体だと思ふ。

かくして私は自分でも稀有と思える様々な縁がこの私のいのちをもたらししていると思っている。過去や現在の人間ばかりでなく、動植物も自然現象も含めて、様々な関わりが、このいい加減な人生を歩む私を生かしてくれている。つまり私是不孤である。自分のいただいているいのちを味わいながら、すべての存在に対する報恩のためにも自分の余生は可能な限り忘己利他の生き方をしたいと思ふ。

青空も、星空も、そよ風も、嵐や雷鳴も、夏の暑さや冬の寒さも、そして路傍の一輪の花もうれしい。



研究室 同期会 同窓会 紹介

第二十九回社会学同窓会

瀬崎 讓 廣

社会学同窓会の総会は、六月三日（土）、山口市湯田は防長苑にて開催されました。今回の参加者は、現職の先生方四名を含めた、総勢二十四名でした。

一番若い参加者は平成十二年卒の私でしたが、今回は平成以降の若い世代が（と言ってももう三十代ですが）多く集い、参加者の顔ぶれも昭和二十年代から平成の卒業生まで幅広く、近年では一番にぎやかな会となりました。また、山口での開催ということもあり、参加者は山口県内在住の者がほとんどとなりました。

だが、広島や岡山、最も遠いところでは大阪から駆けつけた同窓生もいました。

恥ずかしながら、私は今回が初の参加となりましたが、同窓生の年代の幅に驚きました。今回の参加者で一番上の世代の方は昭和二十八年の卒業生です。私が研究室においてある写真や「研究室ノート」（註・昭和五十一年に始まった学生同士の連絡ノートです。今も続いています）などで知っている研究室の様子は、せいぜいここ二十五年から三十年程のものでしたので、あらためて社会学研究所の歴史の深さに思い至らされました。さて、今回の同窓会では、現職の先生方に直接お世話になった平成以降の同窓生が多く集まったということもあり、

懇親会が終わった後、これらの同窓生名ほどで先生方を（時候、不適切な表現かもしれませんが）拉致し去り、二次会へと繰り出しました。二次会でも二時間ほど話し込みましたが、それでも我らなお飽き足らず、さらに小谷先生を連れ去って三次会へと向かいました。三次会でも二時間ほど話し込みましたが、やはりそれでもなお飽き足らず、四次会会場へと向かったのです。さすがに、そろそろ日付をまたぐ時間でしたので、小谷先生は三次会にてようやく放免と相成りしましたが。

今回、同窓会に参加して、社会学研究所の築いてきた文化の長さを再認識できましたし、学生時代にお世話になった諸先輩方とも楽しい時間を過ごすことができました。次回は大阪です。今回参加できなかった同窓生の皆さんも、旧友と誘い合って参加されてはいかがでしょうか。

（人文平成十一年度卒）

鴻文会の新事業「留学生への奨学金支給」について

六月十日（土）の鴻文会役員会にて、「留学生への奨学金支給」が諮られ、承認を得ました。今後は以下の規則にもとづいて、鴻文会から留学生に奨学金を支給します。

「奨学金支給規則」

次の条件1～5をすべて満たす人文

科学研究科修士課程2年次の留学生に奨学金5万円を1回限り支給する。

条件：

1) 奨学金支給の時点で、山口大学大学院人文科学研究科修士課程2年次に在籍する留学生であること

2) 鴻文会終身会費を納入済みであること

3) 国費留学生、私費外国人留学生学費奨励費受給者でないこと

4) 修士課程修了に必要な単位の半分以上を1年次に修得していること

5) 上記の1～4の条件をすべて満たす者の中で、1年次の成績が上位3位以内であること。ただし、3位が複数名いる場合は、その学生たち全員を3位として扱う

■鴻文会 会員名簿利用規則■

一、会員名簿の更新（新規入会・異動に伴う）と保管は事務局で行う。

二、会員名簿は会員に限り開示することを原則とする。

三、会員名簿は、会員相互の親睦、会の発展を目的とした利用に限り使用することができる。営利を目的とした利用は禁止する。

四、会員名簿の開示は、直接に事務局で求めるか、郵便またはファックスで申し込み、事務局は、申し込み者が会員であることを確認して会員名簿を送付する。これにかかる経費は利用者が負担する。

五、会員名簿の開示申請者名簿（利用者名簿）を作成し事務局で保管する。

平成17年度事業報告

1. 第32回役員会 (6月4日)
2. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会 (7月6日)
3. 山口大学同窓会連合会理事会 (7月15日)
4. 第7回総会 (8月20日)
5. 会報「鴻文」第25号発行 (1月)
6. その他

平成17年度決算

収入総額 3,263,342円 支出総額 2,319,225円 残高(次年度繰越金) 944,117円

<収入の部>

科 目	当初予算額	決算額	比較増減	摘 要
繰越金	586,441	586,441	0	
会費収入	2,040,000	2,000,000	△40,000	10,000円×200人(17年度入学者、過年度分を含む)
繰入金	0	0	0	
賛助金	200,000	644,360	444,360	賛助金(H.17年4/1～H.18年3/31)
雑収入	0	32,541	32,541	教育研究後援財団家賃3ヶ月分、預金利子
合 計	2,826,441	3,263,342	436,901	

<支出の部>

科 目	当初予算額	決算額	比較増減	摘 要
会議費	100,000	33,946	△66,054	役員会、交通費、その他
印刷費	230,000	240,345	10,345	会報印刷5,250部、封筒印刷5,000枚
郵送料	400,000	426,535	26,535	会報郵送料、葉書購入、通信連絡費
事務所運営費	820,000	761,100	△58,900	家賃350,000円 人件費366,100円 事務所経費45,000円 (電話、電気、町内会費)
ホームページ維持費	140,000	93,733	△46,267	プロバクタ-契約料、メルウイルスチェック料、謝礼その他
事務費	20,000	25,356	5,356	消耗品、その他
寄付金費	250,000	100,000	△150,000	日中学術交流奨励会
慶弔費	50,000	35,000	△15,000	各同窓会への祝い金、その他香典料
積立金	0	0	0	
総会費	700,000	563,310	△136,690	
予備費	116,441	39,900	△76,541	懇親会補助、その他
合 計	2,826,441	2,319,225	△507,216	

<特別会計>

科 目	16年度財産	17年度財産	比較増減	摘 要
中期国債ファンド	1,411,777	1,411,777	0	
定額預金	3,309,000	3,309,000	0	H.12～H.16年一般会計より繰入
定額預金	671,000	671,000	0	H.13年、H.14年度賛助金より繰入
合 計	5,391,777	5,391,777	0	

平成18年6月8日、監査の結果過誤なく的確に経理されていることを確認します。

監 事 藤 井 英 樹
北 川 健

平成18年度事業計画

1. 第33回役員会 (6月10日)
2. 山口大学同窓会連合会理事会 (6月29日)
3. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会 (7月21日)
4. 会報「鴻文」第26号発行 (12月)
5. その他

平成18年度予算

<収入の部>

科 目	18年度予算額	17年度予算額	比較増減	摘 要
繰 越 金	944,117	586,441	357,676	
会 費 収 入	2,070,000	2,040,000	30,000	10,000円×207人(18年度入学者)
繰 入 金	0	0	0	
賛 助 金	200,000	200,000	0	賛助金(H.18年4/1~H.19年3/31)
雑 収 入	0	0	0	
合 計	3,214,117	2,826,441	387,676	

<支出の部>

科 目	18年度予算額	17年度予算額	比較増減	摘 要
会 議 費	100,000	100,000	0	役員会、交通費、その他
印 刷 費	250,000	230,000	20,000	会報印刷5,500部、封筒印刷5,300枚
郵 送 費	450,000	400,000	50,000	会報郵送料、葉書購入、通信連絡費
事 務 所 運 営 費	820,000	820,000	0	家賃、人件費、事務所経費(電話、電気、町内会費)
ホームページ維持費	140,000	140,000	0	プロバイダ契約料、メルウイล์チェック料、謝礼その他
事 務 費	25,000	20,000	5,000	消耗品、その他
寄 付 金 費	100,000	250,000	△150,000	日中学術交流奨励会
慶 弔 費	50,000	50,000	0	他同窓会への祝い金、その他香典料
積 立 金	1,000,000	0	1,000,000	特別会計へ繰入
総 会 費	0	700,000	△700,000	
予 備 費	279,117	116,441	162,676	懇親会補助、その他
合 計	3,214,117	2,826,441	387,676	

<特別会計>

科 目	18年度財産	17年度財産	比較増減	摘 要
中 期 国 債 フ ァ ン ド	1,411,777	1,411,777	0	
定 額 預 金	3,309,000	3,309,000	0	H.12~H.16年度一般会計より繰入
定 額 預 金	671,000	671,000	0	H.13年度、H.14年度賛助金より繰入
定 額 預 金	1,000,000	0	1,000,000	H.18年度一般会計より繰入
合 計	6,391,777	5,391,777	1,000,000	

おり、前期一コース、後期三コースの、合計四コースを開講し、それぞれ四回ないし八回の講義を行い、多数の方々の聴講をいただきました。土曜日の午後、社会人、大学生、高校生が楽しく学んでおります。

会場 山口大学人文学部教室

前期(五～七月)

外国語学習コース(英語) 田中 晋教授 『英詩のこころ』

後期(十月～十一月)

異文化交流コース 乾 秀行助教授 『世界の中の日本語』

異文化交流コース ジョン・フィリップス助教授

『スコティッシュダンスを一緒に』

外国語学習コース(ドイツ語)

フランツ・ヒンターエーダー||エムデ教授

『ハイジの世界』

(三) 出前講義

人文学部は、幅広い年齢層の知的探求心に応えて、「必要なとき、いつでも学べる」場となることを目指して、本学部教員が気軽に大学の外に向いて講義する「出前講義」を行っております。来年度も、今年度同様、地域社会の要望に応じてまいります。教員の講義できる領域などを掲載したパンフレットがありますので、お気軽にお申し出ください。(山口大学エクステンションセンター、電話 083-933-5059・5150、<http://www.ext.yamaguchi-u.ac.jp/>)

人文学部のコース再編について

人文学部では、平成19年4月よりコースのリニューアルを予定しています。人文社会学科が4コースから3コースへ、言語文化学科が5コースから6コースへと再編されます。各コースの詳細については人文学部ホームページ (<http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~hmt/index.htm>) から、「コース再編のお知らせ」を御覧ください。

<< 現在 >>

人文社会学科	言語文化学科
人間論コース	日本語文化論コース
地域歴史文化論コース	中国語文化論コース
社会情報論コース	英米語文化論コース
博物文化論コース	独仏語文化論コース
	言語情報論コース



<< 平成19年度以降 >>

人文社会学科	言語文化学科
哲学・思想コース	日本語学・日本文学コース
	中国語学・中国文学コース
歴史学コース	アジア言語学コース
	英語学・英米文学コース
社会学コース	ヨーロッパ言語・文化コース
	言語情報学コース

研究室紹介

◎人間論コース

この十年間に人間論コースの教員は大きく移動しました。教養部改組直後には、哲学二名、倫理学三名、中国哲学二名、日本思想二名の計九名の教員が在籍していました。ところが、まず倫理学の遠藤徹先生が聖心女子大学に転出され、その際に、宗教学分野の木村武史先生をお迎えしました。さらに倫理学の加藤和哉先生がやはり聖心女子大学に、また後に木村先生も筑波大学に転出されました。木村先生の後任としてジユマリ・アラム先生をお迎えすることができましたが、加藤先生の後任補充はかきませんでした。その時点で倫理学は上野修先生が一人で担当されることになりました。さらに、哲学の松本正男先生が麗澤大学に転出後一年ほどで逝去されるといふ悲しい出来事がありました。その際にも哲学の後任補充はかきませんでした。最後に上野先生も大阪大学に転出され、この度は、後任に工学部より古荘真敬先生が赴任されました。こうした経緯の結果、現在の教員は、脇條靖弘教授（哲学）、古荘真敬助教授（倫理学）、ジユマリ・アラム助教授（宗教学）、高木智見教授（中国哲学）、林文孝助教授（同）、豊澤一教授（日本思想）、柏木寧子助教授（同）となっております。

人間論コース志望の学生は、毎年約二十名前後ですが、ここ数年は若干増えている傾向にあります。それにして、目の前の具体的でわかりやすい成果を求める活動に埋没しがちな中で、そういう活動の本当の意味は何かを

立ち止まって吟味し、それをしっかりと学問的に追求しようという意欲をもった学生諸君が数多く人間論コースに集まって来てくれていることは頼もしい限りです。たまたま、「現在」「この場所」で通用している既成の尺度で測られた、目に見える具体的な成果や利益を追求するのは簡単ですが、その基盤を問うような探求は、周りから見ると奇異に映るかもしれません。しかし、二年間、三年間という短い期間であれ、真剣にそのような問いを探索するという経験は、学生諸君一人一人の将来を支える基盤の一部となると信じています。そのような意欲的な学生諸君の期待を裏切らないように、質の高い授業、指導をすべく教員の側もいっそう努力を求められていると考えています。

人文学部のコース再編に伴って、平成十九年度より（実質的に新コース）に学生を迎えるのは平成十九年度入学の学生が二年生になる時からですが、「人間論コース」は、「哲学・思想コース」として生まれ変わることになりました。新しい哲学・思想コースには、これまでの人間論コースの教員に加え、美学・美術史の奥津聖教授と藤川哲助教授が所属されます。両先生のご専門はどちらも人間論コースの学問領域に近く、これまでも折あるごとに研究、教育両面で御助力をいただいておりますが、この度正式に所属を同じくして一緒に仕事ができることになりました。学生諸君にとっても、芸術の歴史と実践、そして芸術哲学という魅力的な学問領域が加わることで、これまで以上に幅広い関心に答えられるコースになるでしょう。

（人間学講座・脇條靖弘教授）

鴻文会「賛助会員」の制度に 各位のご協力をお願い致します

鴻文会活動は、実質、毎年度入学生される新入生がご入金下さる「終身会費」（二万円）、合計約一九〇万円をもとに行われております。

鴻文会は、この二五年の間、同窓会総会の開催、人文学部や日中学术交流奨励会への種々の支援、名簿管理、会報発行などの活動を行ってまいり、近年はこれに、ホームページの管理が加わり、新たに「留学生への奨学金支給」事業を開始するなど、活動が多様化しております。しかし、それらの活動を支えていく資金は、昨今の厳しい経済事情もあって、決して安心できる状態ではありませんでした。

そのような中であって、お陰をもちまして、ここ四年間卒業生会員や元教員の皆様から多額のご厚志をいただき、本年度開催の諸活動の資金に充てることができました。ひとえに皆様のお力添えのたまものでございます。

活動を支えて下さった各位のお名前を左に記載して、お礼に代えさせていただきます。

なお、本年度も、賛助会員について、引き続きお力添えをたまわれますようお願い申し上げます。加入者名「鴻文会」（郵便振替口座015000415902）と記した振替用紙を同封いたしております。それをお使いいただき、何卒、一口千円（なるべく二口以上）のご寄付を、よろしく願います。

平成一七年度賛助会員

（順不同、敬称略）

青木寛、梅田正、大串明子、近藤千鶴子、松本馨、小野徹、田辺章友、瀬川芳昭、沖中武志、林協三、岩熊寛、溝部忠増、大港章子、小川

朝子、武谷実、藤永公然、永井温樹、殿河内恭子、佐々木洋子、中垣八朗、藤田和彦、江本博彦、松浦学、金山淳之助、高橋幸輔、榎本美由紀、長井和子、平田隆一郎、白井美子、田村君子、橋本美和、西村敏通、橋本学、中村あけみ、田中厚子、篠崎隆弘、平田昌司、前原洋子、富永寛子、小池美佐子、加藤寛子、豊原葉子、脇正彰、椎野由紀子、利重迪子、添田弘毅、中島まゆみ、若尾より子、生野龍二、井上幹二郎、小嶺博子、河口正、松元真佐子、中本孝民、戸谷美代子、伊豫英城、森山響子、中嶋みどり、小西啓子、佐藤愛、田中伸、佐々木賀世、原省吾、若尾功一、小野哲男、谷本亜弥、重村和子、桑木重雄、八田順子、登城孝胤、青木亜希子、河中英二、井上真理子、井上基子、井上範子、岡野幸夫、大塚博久、相川忠久、丸山貴至、竹田守恵、光永昇、手島文忠、橋口博、藤澤敏行、三木允彦、平山美紗子、長岡恵美子、長岡克巳、大八木民恵、古池光顯、山本力、柳谷静、宮藤隆夫、伊藤一亘、山内正一、菊浦俊静、添田建治郎、笠井靖子、藤本千晶、久米慶典、棚町亜紀子、濱崎勢津子、野村悦子、岩本春男、田仲弘親、小牧久玉、島田麻希子、磯田朋子、磯田敏行、北條敦子、棚町亜紀子、山本力、武藤辰喜、安村信、澄江、荒谷寿美郎、谷川智子、谷美代子、八田順子、武田伊勢雄、加藤寛子、高谷弘子、伊東敏一郎、永久亨、橋本学、岩熊寛、森重輔、林協三、栗林博厚、橋本学、若熊平田隆一郎、殿河内恭子、桐原恵子、大港章子、馬場敦子、若尾より子、藤田和彦、竹田守恵、沖中武志、國弘豊嗣、中垣八朗、宮崎征秀、向直也、石丸一政、八田彰、伊豫英城、藤永公然、梅田正、松下富子、青木寛、中野毅、中原省吾、岡村君子、榎本美由紀、安井千夏、田中美喜、利重美美、生野龍二、服部章子、中嶋みどり、舛本英子、中野誠二、原早苗、河口正、隅昭志、金子建二、植山渚、亀石ゆかり、光永昇、宮崎祐子、宮内美貴子、井上範子、井上基子、井上真理子、竹内通弘、吉村崇、公納國雅、林紀元、小寺マツコ、巨崎みゆき、芹沢園枝、米屋廣志、徳原淳子、松浦学、村上正和、藤澤敏行、山本純夫、大串明子、椎野由紀子、上村義信、奥畑信哉、登田幸子、原田玲子、松村孝信、笠井靖子、登城孝胤、小篠美智子、武谷実、菊谷進、相川忠久、近藤千鶴子、田中弘親、野村昌弘、小池美佐子、平田則雄、平尾美恵子、高橋敬子、福永亮太、金山嘉代子、田代枝里子

新任教員の挨拶

ごあいさつ

皆尾 麻 弥

今年度から人文学部比較言語文化講座でアメリカ文学を担当させていただいております。皆様と申します。ここで挨拶させていただけることを大変嬉しく思います。着任して既に幾月か経ちましたが、山口大学人文学部の暖かい雰囲気の中で仕事させていただけるこの有難い幸運を、日々実感しております。

教育の経験など無きに等しく、どうかすると学生に間違えられてしまう私のような者が山口大学に招かれるというのは、どう考えてみても夢物語のようで、未だに信じられず、恐らくこうして『鴻文』のために文章を書いているのも夢なのかも知れず(だとしたら『鴻文』だなんて、私も洒落た名前をよく考えついたものです)、そのうち俄かに「人文学部」も、大学構内の鉄パイプにちょこんととまっている愛らしい雀や栗鼠の彫刻も、全て泡のようにぱちんとはじけ飛んで、この夢から覚めてしまうのかもしれない。

私が専門に研究しておりますのは、ロシア生まれのアメリカ作家、ウラジミール・ナボコフの作品です。おそらくこの直前の、極端に息の長い悪文は、ナボコフ特有の長い長い、どこま

でも伸びていく冬の夕暮れの影のような文に毒された結果でしょうか。私の仕事は、アメリカ文学について学生さんに教える、というような大それたことではなく、ナボコフを中心とした一人ひとりの作家が残した愛おしい言葉、声を、学生さんたちと共に髓まで味わうということだと思っています。

私は単なる「ナボコフ愛読者」に過ぎず、教育者としての自覚を欠いていると言ってもいいかも知れません。理想的な教育者というのがどういう人物のことを表すのか、私にはまだ分かりませんし、その答えは永遠に得られないかも知れません。こうした手探りの状態ですが、学生さんと共に成長して学び続けることによつて、どこか遠くに理想というものがぼんやり見えてくるはずですし、そうすればそこに向かってゆっくり進んでいくことができると思っています。

山口大学での「夢」は始まったばかりですが、もしこれが本当に夢だとしたら、私には願ったことが何でもできるはずで、努力すれば空だつて飛べるのです。ですから、与えられたこの有難い夢の中で私のなすべき役割をきちんと果たし、そしてこの夢を最良のものにするために努力したいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

(比較言語文化講座・講師)

御退任教員の挨拶

回想四十年

田 中 晋

昭和四十一年山口大学文理学部を卒業して、いつしか四十年の歳月が流れ去り、いよいよ定年を迎える。感慨入りのものがある。

山口大学を卒業し、京都大学大学院に学び、九州大学に赴任したのは弱冠二十五歳の時であったから思えば永い旅路であった。やがて九州大学より京都大学に転出し、二つの大学を経験した後、平成二年の秋、幸いにして母校に職を得て故郷に帰ることができた。

何処にいても母校に戻ればどの願いは常にあったが、所詮それは願望に止まるのではとの思いがあった。その願望が現実のものとなった時の有り難さは言葉には尽くせぬものがあった。「有り難い」とはまさにこのことである。願望が成就を見るのは、実はめったに有り得ぬことであるから。これでやっとな落ち着けたと身の仕合せをつくづく感じたものである。

それから十七年が過ぎ去ろうとしている。来し方を振り返れば様々な思いがよぎるが、忘れられないのは初めて学生に接した時の、今までとは違った感慨である。確かに学生には違いない、しかし同時に心の中では、自分の「後輩」との思いの方が強かった。それが

次第に自分の「子供たち」という感覚になって来たのは不思議である。さすがに「孫」とまでは思っていないし「おじいさん」と呼ばれたくもないが。これも、教員組織というものが別にあつて、そこから出前講義をするような仕組みであつたらどうであらうか、学生に対するこのような思いは生ずべくもない。教員組織と教育組織が一体となつて、常に教員と学生の対話的接触の可能なところにこそ教育の妙味があるであらう。

この数年間で大学も急激に様変わりしてしまつた。決してよい方向へ変つたとは思われない。平成十六年、国立大学の法人化後、大学に市場の競争原理が持ち込まれ、全国右を向いても左を見ても、競争に打ち勝つ算段にしのぎを削り、評価への対応に明け暮れる毎日を強いられる、腰を落ちつけてじっくりものを考える暇もない。肝心なことに専念できる余裕が無くなつてしまつたのは残念である。大学の行く末を案じずにはおられない。

赴任してみると、人文学部の学問領域の整備状態は、地方の国立大学としては稀に見るものであつた。全国の人文学部部長会議では、「山口大学の人文学部はその実、文学部ですすね」と他大学の学部長より羨まれる存在でもある。その人文学部に属する領域の研究は今日最も重要なものであらう。機械文明の極まるころ、人間は人為と技術で一切を処理しようとするが、今の世の有様を見るにつけ、「人間とは

田中 晋教授 最終講義のお知らせ

日時 平成19年1月27日(土) 午後2時より
 場所 山口大学人文学部大講義室
 演題 「ルネサンス期英文学にみる天と地の照応
 ——エドモンド・スペンサーの場合」

*なお、講義終了後に人文学部学生談話室にて田中先生を囲む茶話会も予定してございます。

詳細については、山口大学人文学部英米語文化論コースのホームページ (<http://ds0.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~beiei/index.html>) にも掲載する予定です。なお、田中先生に師事なさった同窓の方々には、別途ご案内を差し上げます。お問い合わせ及びご連絡は、人文学部宮原研究室 (miyahara@yamaguchi-u.ac.jp、電話083-933-5281) まで。

何か」を問う学問の大切さが痛感される。自然科学に対して、一方に人間に関する学問がなくてはならぬ。今、大学の現状を見るに、前途は決して平坦なものではないが、諸学の基盤を担う人文学部に全学の理解を得たいものである。

退職に当り、山紫水明の我が故郷、山口の地において、よき同僚、職員、学生、そして同窓生のみなさんに恵まれたわが身の幸せを感謝し、人文学部に幸あれと祈りつつご挨拶と致します。

(比較言語文化講座・教授)

山口大学のこと

霧岡昭夫

平成四年の暮れの事だったと記憶している。大学(東京教育大学)の先輩である関一雄先生から電話をいただいた。「山口大学で言語情報処理学講座を開設することになった。国立国語研究所の中野洋さんに人選を頼んだところ、君が最有力候補だと言われた。来てもらえるか」という内容だった。それまで約五年間、上越教育大学で国語学を担当して、単身赴任生活をしていたので、その延長と考えて即座に「行きます」と答えてしまった。あとから家人に、往復の交通費や時間のことをもっとよく考えて、相談すべきだったと文句を言われてしまった。(ちなみに、その後、年二回のボーナスはすべて交通費と消えてしまうことになった。)

関先生の話では大学設置審の決まりで、五年間は勤めてほしいということだったが、いざ来てみると、他からの勧誘もなく、十三年以上経ってしまった。一年平均七人位の卒論指導をしたから、一〇〇人近い卒業生を送り出したことになる。思い出としてはそれ位のことしかない。言語情報処理学は、今では、ふつうの学者、学生がみなパソコンを操作して研究する時代になって、存在感がなくなってきた。隠退後は、もとの日本語研究者となって

やっついこうと思っている。

(言語情報学講座・教授)

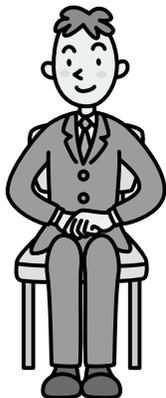
現役学生の就職活動への

ご支援のお願い

鴻文会会員の皆様にはますますご吉祥のこととお喜び申し上げます。人文学部四年生・修士二年生の就職状況もかつての氷河期を脱し、お陰様でかなり好転して参りました。しかしながら今まで過ごしてきた学生生活と職業人の生活には大きな隔たりがあり、仕事に対する漠然としたイメージだけで就職活動を行ない、結果的にうまく行かないケースが少なからずあるようです。各分野の仕事の現場におられる卒業生からの生の情報提供やアドバイスなどがあれば現役学生の就職活動に大いに役立つと思われれますが、人文学部では卒業生のデータは持つていませんので、手をこまぬいている状態です。そこで、民間企業・公官庁・学校あるいは自営業などで活躍の先輩の方々のお力をお借りしてOB・OGによる業種別座談会を開催し、それぞれの業種・職種の仕事の実態や採用情報などを話していただき現役学生の質問に答えていただく場を設けたいと考えてお

ります。お勤め先の人事担当部署にもこちらから連絡し、勤務の一環とみなしていただくようお願いいたしますし、協力いただける方に金銭面でのご負担はかけたくありません。協力していただける方は、お名前、卒業年月(例：一九九〇年三月)、コース・専攻など(例：人間学コース)、勤務先名、所属部署名、メールアドレスをメールにてお知らせいただければ幸いです(アドレス：hc137@yamaguchi-u.ac.jp)。ご多忙のところ誠に申し訳ございませんが、どうかよろしくお願い申し上げます。

人文学部就職支援委員会



平成十七年度 人文学部卒業生・大学院修了生進路状況

人文社会科学科

農業

自営業

建設業

興和ホーム(株)、セキスイハイム九州、大和リゾート(株)、ハウジングスターグループ

製造業

日本食研(株)ジーンズカジユアル、ダン、(有)ファスレ、康正産業(株)、(株)コーコス信岡、三栄印刷(株)、中央出版(株)、(株)中山製鋼所、難波プレス工業(株)、浜本工芸、(株)ジュンテンドウ

運輸・通信業

JTB中国四国、九州マツダ

卸売・小売業

(株)ジャパンビバレッジ、(株)オークワ、(株)ポプラ、コープ山口、広島伊丹電気(株)、宮脇書店、極東ファデー、広島トヨタ自動車(株)、ニトリ

金融・保険業

日興コーディアル証券(株)、伊予銀行、福岡銀行、明治安田生命相互会社福岡支社、八十八銀行、(株)コーナン商事、青山商事、(株)福住

サービス業

山口県勤労福祉共済会、(株)エバルス、秀英予備校、アタックコーポレーション、みのり農業協同組合、トランスコスモス、岩崎グループ、萩本陣、JA山口宇部、マークス(株)、コベルコ健機(株)、総合警備保障、愛グループ(株)、応研、ワーナーマイカル、イズミ

公務員

警視庁、広島地方検察庁、中国運輸局、広島国税局、郵政公社、大阪府庁、岡山市役所、奈良市役所

進学

山口大学大学院、九州大学大学院、大阪大学大学院、専門学校

言語文化学科

建設業

興和ホーム(株)

製造業

雲海酒造(株)、松月堂製パン(株)、寿製菓(株)、(株)中央フーズ、(株)インターフーズ、赤坂印刷(株)、山口ゼロックス(株)、プレスネット(株)、タイホー工業(株)、三菱重工業(株)、江藤酸素(株)、(株)ウツドワン

運輸業

日本航空インターナショナル(株)、JALインターナショナル、エアニッポン(株)、防長交通

情報通信業

富士通鹿児島インフォネット、(株)オンテック、郵政公社、ソフトウエア興業

卸売・小売業

中外製薬(株)、ちまきや、(株)コスモス薬品、(株)博多魚嘉、イオン(株)、(株)イズミ、岩田屋

金融・保険業

広島銀行、呉信用金庫、光陽アイナシヤルトレード、津和野信用金庫、西京銀行、日本生命保険総合会社

サービス業

グリーンズホテル、ロイヤルコーポレーション(株)、NOVA、(株)物語コーポレーション、向学社、福岡記念病院、大田市立病院、JA都城、JA全農山口(株)TLCグループ、(株)百人力、ワールドストアパートナーズ、九州大学ユーザサイエンス機構、マイテック(株)、田中金属(株)、ブレイン(株)、東亜外業(株)、郵船トラベル(株)、(株)アベブ、HIS、(株)サニックス、(株)アクティオ、サンデン旅行、(株)福岡エア・サービス、(株)JIMS OS

教育・学習支援

山口県教員、広島県教員、福岡県教員、長崎県教員、西日本国際教育学院、つばさ進学塾、小森進学塾

公務員

広島大学、厚生労働省山口労働局、法務省入国警備官、海上自衛隊、郵政公社、広島県警、防府市、三次市役所

進学

山口大学大学院、広島大学大学院、大阪大学大学院

入学年度別学生数

(平成17年11月1日現在)

学科・専攻		性別	17	16	15	14	13	12	11	10	計
人文学部	人文社会科学	男	50	41	40	35	9	3	2	4	184
		女	57	62	59	65	2	1	0	0	246
		計	107	103	99	100	11	4	2	4	430
	言語文化科学	男	17	16	20	20	4	1	2	1	81
		女	77	77	77	75	9	1	1	0	317
		計	94	93	97	95	13	2	3	1	398
	合計	男	67	57	60	55	13	4	4	5	265
		女	134	139	136	140	11	2	1	0	563
		計	201	196	196	195	24	6	5	5	828
	人文科学研究科	地域文化攻専	男	6	6	0					
女			6	4	0						10
計			12	10	0						22
言語文化攻専		男	2	1	1						4
		女	6	7	0						13
		計	8	8	1						17
合計		男	8	7	1						16
		女	12	11	0						23
		計	20	18	1						39

人文科学研究科

郵政公社、西京銀行、山口大学図書館、中原中也記念館、広島大学大学院、ウエールズ大学

同封の「異動通知カード」で会報送付先をお知らせ下さい。

編

集

後

記

卒業生の皆様、会報二十六号をお届けいたしました。

この鴻文会報「鴻文」は、怠惰な担当者が研究教育の合間を縫って（正確に申し上げれば、会議と雑用の合間を縫って）編輯しましたので、権代委員に巻頭を飾る玉稿を頂戴したのみで、他の方々に連絡をとる時間的精神的な余裕がありませんでした。どうかご海容ください。

一時期、「鴻文」の編輯は鴻文会委員の方と協同で行っていましたが、連絡や日程調整が煩わしいことから、いつしか学内幹事が単独で請け負うという形にもどってしまいました。その学内幹事のうち、田中晋先生が今年度三月末を以てご退職になります。更にこの先十年経たない内に学内幹事は半数にまで減ってしまい、「鴻文」を毎年発行するという現在のスタイルの維持が困難になることは必定です。鴻理会（文理学部理学科、理学部、大学院理学研究科、大学院理工学研究科同窓会）のように数年間隔の発行とするか、紙媒体による発行は見あわせてホームページの充実につとめるといった形に変更ざるを得ないかもしれません。山口市もしくは近隣にご在住の卒業生で、「鴻文」の編輯を買って出てやる

うという方がおいででしたら、是非とも連絡事務所まで一報ください。心から歓迎いたします。

異動通知カードで会報送付先をお知らせ下さるようお願いしております。ご住所などに異動が生じた方は、koubunkai@nifty.com まで一報ください。

本年二月五日、渡邊眞治先生（西洋史学、昭和五十八年ご退職）が八十六歳でお亡くなりになりました。また、七月五日、上村幸次先生（中国文学、昭和四十五年ご退職）が九十九歳でお亡くなりになりました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

最後になりましたが、会員の皆様のご健勝と一層のご発展を祈念いたしております。

(N)

